

学ばくじ

(本編第17章より)

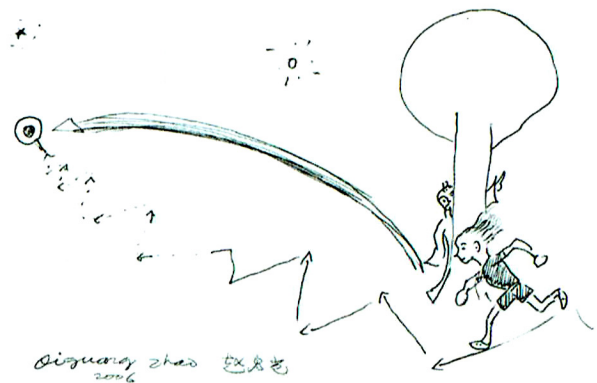


チーグアン・ジャオ 北京出身。カールトン・カレッジ教授、同済大学特別招聘教授、清華大学客員研究員などを歴任。中国社会科学院大学院で英米文学修士号、マサチューセッツ大学で比較文学博士号取得。著作に「A Study of Dragon, East and West」、「Do Nothing & Do Everything」、「古道新理」、「老子的智慧」、「世路心程」、「客舟聽雨」、「コンラッド小説選」など。2015年3月、マイアミでの遊泳中の事故により永眠。ミネソタ州の「スタートリビューン」紙で「北極オーロラの星」と評価された。

町田晶 日中翻訳学院修了。東北大学文学部東洋日本美術史専攻、東北大学大学院文学研究科中国哲学専攻。学生時代の一人旅で中国文化の奥深さと中国人の温かさに触れたことから本格的に中国語を学ぶ。翻訳得意分野は思想、哲学、文学、食文化等。

生きて行く上で、間違っただけをしたり、間違っただけを言ったり、あるいは誤解したりというのは避けられないことだ。しかし、我々はそれをつねに修正し、最後には目標を達成する。

道を踏み外したくなくれば自分の無知を知り、自分の限界に気づくことだ。普通の人を知ったかぶりをするば滑稽(こっけい)だし、ある意味勇気があるとも言えるかもしれない。しかし、大きな権力をもつ者が知ったかぶりをすると大変な破壊



その時その時の方向は全部間違っているけど、修正をつづけていけばゴールに近づけるよ

てるという意味ではなく最高という意味にとらえる。学びが最高に極まれば、心配事がなくなるといふ解釈である。第二は儒学者による伝統的な解釈で、瑣末(さまつ)なことにとだわらず学んでいけば悩みがなくなるというもの。第三は字面通りの解釈で、学ぶことを一切やめれば悩みがなくなるというものだ。第一の解釈は老子の一貫した主張に合わず、老子が孔子になってしまっている。第二は一種の折衷案であり、我々にも理解しやすい。しかし、老子は明らかに、知をすっかり捨て去れと言っている。人の悩みは知らず生まれる。人がものごとを分析する時、運命をコントロールしようとする時、あるいは宇宙の支配者になろうとする時、大変な事態におちいる。だが、学ぶことを完全にやめる事など本当に可能なのだろうか。実を言うと、老子

をもたらす。無知に権力が加わるのは最悪だ。このように見えてくると、悪い事態を避けるには学ぶのが一番らしい。孔子は、学を修めたものだけが良い君主になれるとした。ところが、老子はこれに對しあえて挑戦的な立場を取る。学を絶てば憂いなし。ハイとイエ、そんなに違いがあるだろうか。善と悪、どれ程の違いがあるだろう。聖人が恐れるものを恐れないわけにはいかない。夜明け前、私はひとりだ。人々は忙しく動いている。まるで盛大な宴のように、春の見晴らし台に登るように。私だけがひとり静かだ。まだ形を持たないもののように、



石の中にも真理を見いだす古の賢者

この「学を絶てば憂いなし」という部分は、一見すると、学ぶことをやめれば心配事がなくなると言っているように見える。しかし老子は本当にすべての知を捨てると言っているのだろうか。人はこれに對し、大きく分けて三つの解釈をしてきた。第一の解釈では「絶」の字を捨

の言い方は少し大き過ぎるのだ。イラストの中の少女はゴールに向かって走っているが、その時その時の方向は全部間違っている。はじめ左に向かって走るがあまりに行き過ぎるのはよくない。そこで今度は右に向かって走るが、それも行き過ぎるのはよくない。それでも最後にはゴールにたどり着く。なぜなら、その時々で左から右、右から左へと自分の向かう方向を修正するからだ。修正することにゴールとの距離が短縮されている。我々も毎日同じようなことを繰り返している。車をまっすぐ走らせる時も、ハンドルを左へ少しまわし、右へ少しまわしという動作をつねにくり返している。車がもし氷の上を左にすべり始めたら、行きたい方向はまっすぐでもハンドルを右へまわす。そうしなければ溝へ落ちてしまうからだ。生きて行く上で、間違っただけをしたり、間違っただけを言ったり、あるいは誤解したりというのは避けられないことだ。しかし、我々はそれをつねに修正し、最後には目標を達成する。「徹底してコースを変えず」、修正を拒(こば)んでいると悲惨なことになってしまふ。南へ向かったり北へ向かったり、それぞれの方向が全部間違っていたとしても、その時々で方向転換したり、自分を反省したり、行いを修正したりして正しい方向へ向かうよう調整する。車が右に向かえばハンドルを左に切ることで前進する。たぐさんの間違いとたぐさんの自己修正をかさねて最後にはゴールにたどり着くのだ。もし堤防の上を走っている自転車車が左に寄ったら、我々は直進させようとして「右！」と叫ぶだろう。老子が学ぶことをやめよと言うのも間違っただけを示しているように見えるが、やはりその

言葉は正しい。我々はそのアドバイスを言葉通りに受け止め、極端な方向に向かっていけない。少女がゴールに向かってジグザグに進むように、また、車を直進させる時ハンドルを何度も左右に回して調整するように、「正しい方向」はたぐさんの間違っただけ方向が互いに打ち消し合った結果得られるものなのである。あらゆる知を捨てよという老子の言葉を受け、詰め込み学習をやめるのなら、老子のアドバイスはやはり正しいのだ。知は人を助けてくれるが、人はまた知に操作されることもある。もし知を信じ込むだけで自分の感覚にたよることがなければ、間違っただけ道を歩むことになる。賛成だの反対だの、問題を複雑にする意見など投げ捨て、自分の道をしつかりと進もう。



“パンを手に入れることはもとより大事だが、その美味しさを楽しむことはもっと大事だ” 比較文化学者であるチーグアン・ジャオ氏が、身近な例から老子の人生哲学をわかりやすく解説した一冊。「よりよい老後」のために心身ともに無理を重ねる現代人に向け、老子の教えをもとに、肩の力を抜いて自然に生きることを勧める。2016年4月、日本僑報社刊